広島経済大学研究論集　第三十七巻第四号　二〇一五年三月

旧制中学校教科書『中等国文五』『国文六』の特徴と教養観の研究

武藤清吾*

一　はじめに

1　本論の位置づけ

本論は、一九三〇年代から五〇年代にかけて、日本型教養形成の基盤が「国語」教育やその周辺の文化構造の中でどのように実践的に生成され発展させられてきたかについて、その具体的な諸相の調査を行ったうえで、日本型教養形成と「国語」教育とがどう関連づけられるかを考察することを目的とした研究の一環として公表するものである。(1)

この研究は、二〇世紀の中等教育から高等教育までの教育課程に教養概念がどのように位置づいてきたかを考察することで、二一世紀以降の日本型教養のあり方と「国語」教育との関係を見通すことを全体構想としているものの一部であり、(2)科学研究費基盤研究（C）「大正、昭和前期における国語教科書と教養形成に関する研究」（平成一九年～二〇年、課題番号19530845）及び平成二二年度広島経済大学特定個人研究費助成「旧制中学校国語・文芸読本の教養観に関する研究」の成果を踏まえるものである。

これまでの研究では、「国語」教育と青年期教養形成との関連を歴史的に考察する最初の時期の基礎資料を提示してきた。一九三〇年代前半までの読本収録教材の総目次、内容紹介や分析、出典などの資料を調査収集して、文芸読本、「国語」読本に示された教養が、他者との自由な共同に基づいた実践によって形成されたという特質を持つものであることを解明した。さらに、他者との自由な共同による実践を「教養実践」という筆者自身の独自概念として提示して、二〇世紀前半の中学生らが獲得した教養の本質を実践の視点から考察する意義を明示した。

2　一九四〇年代の中等「国語」教科書

一九三〇年代後半から四〇年代前半にかけての「国語」教科書は、一九二〇年代から三〇年代前半の教材収録とは大きく異なっている。たとえば、小説の収録が絞られ、評論や説明文などの論理的な文章が増加している。中学生に期待された教養のすがたも必然的に変化した。国民精神涵養の色彩を帯びたものだけではなく、戦時を背景に論理的説明的な言語の学びが期待されていたのである。

それは、当時の「国語」教育論や読本などに示された教養観には他者との共同を困難にする自閉的な傾向が強まったことにある。その背景に

*広島経済大学経済学部教授

は、戦時下の「国語」教育施策と「国語」教科書の問題がある。特に、一九三七年の中学校教授要目中改正に「我ガ国民性ノ特質ト国民文化ノ由来」を明らかにして「国民精神ノ涵養ニ資スル」という文言が加わったことである。これは、文部省の『国体の本義』刊行（一九三七年）、「国家総動員法」公布（一九三八年）と前後した動きであった。

文部省は、一九四〇年九月に中等教育教科書の使用を各教科五種類に限定するよう通達した。需給困難を口実にした、事実上の統制強化であった。その通達に従って五種に限定された「国語」教科書が使用されたのは一九四一年からであるが、前々年の一九三九年度使用実績をもとに使用教科書が決定されている。つまり、それらは一九三〇年代後半に使用された「国語」教科書のうち採択率の高かった教科書であり、一九三七年の教授要目中改正に準拠して編輯され、一九三八年度より使用されたものである。「国民精神ノ涵養ニ資スル」ことを目標にしており、日本国民の精神を涵養することで、当時侵略していた国々や他民族との協力共同をめざす内容ではない。それらの教科書で学ぶ中学生が他者を共同の存在と認めない教養観を持つことになった理由の一つはここにある。

この通達によって、「国語漢文」科では、岩波編輯部編『国語　改訂版』、吉田弥平編『中学国文教科書』、五十嵐力編『純正国語読本　改訂版』、東條操編『新制国語読本』、金子元臣編『新編中等国語読本　新制版』の五種類の教科書に限定された。これらは、一九三七年の「国民精神ノ涵養ニ資スル」ことを目標にした教授要目中改正に準拠して編輯され、一九三八年度より使用されたものである。一九四一年からは、この「五種限定統制」された「国語読本」の改訂版のみが使用されることとなった。

3　五種限定統制移行期の「国語」教科書例の検討と本論の課題

五種限定統制移行期の「国語」教科書例の詳細はすでに別稿で述べているが[3]、本論では『中等国文』『国文』の考察に関わる概要のみ整理しておきたい。

五種限定統制教科書は、一九三〇年代前半の国文中心の教材編成の流れを継承して、まだ文芸色の濃い編輯がなされていた。たとえば、『純正国語読本　改訂版』では、巻一に七課「菖蒲の節句」（島崎藤村）、一三課「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）、一四課「愛犬ポチ」（長谷川二葉亭）、一五課「猫」（夏目漱石）、二三課「ふるさと」（石川啄木）、巻二に七課「武蔵野」（国木田独歩）、巻三に六・七課「厨子王」（森鷗外）、巻四に三課「鰯引」（正岡子規）、二〇課「大川の水」（芥川龍之介）が載っている。

一方で、「国民精神ノ涵養ニ資スル」ことがうたわれ、教材中に皇室讃美、戦時精神高揚を意図した教材が要所に収録された。たとえば、『純正国語読本　改訂版』では、巻一に一課「御修学時代の聖上陛下」（石井国次）、二課「御帽子に御手が」（無署名）、巻二に一・二・三課「現つ神明治大帝」、四課「胸を刻む国旗の上下」（以上無署名）、五課「日の丸の歌」（西条八十）、二七課「明治天皇御製頌歌」（八代六郎）、巻四に二五課「五箇条の御誓文」（徳富蘇峰）が掲載されている。

この二つの傾向を挟んで、紀行、詩、短歌、伝記が収録され、学び手の多様な関心に応えていこうとしている。巻一に六課「良寛さま」（相馬御風）、巻二に二〇課「野口英世」（橘輝政）、巻三に五課「由良の思出」（薄田泣菫）、巻四に二課「二月堂と三月堂」（島村抱月）、巻五に二一課「軽井沢二日」（正宗白鳥）、巻六に一八課「九十九里浜」（伊藤左千夫）、巻七に一〇課「海三題」（白鳥省吾など）二一課「落葉松」（北原白秋）、巻八に一〇課「山庵雑記」（北村透谷）、巻九に六課「榛名山」（高

浜虚子など）など多彩な教材が並べられている。

古典も、『平家物語』『伊勢物語』『竹取物語』『土佐日記』『大鏡』『古事記』『源氏物語』などから教科書に頻出した文章が抄出されており、学び手に幅の広い教養を身につけることを求めている。

一九四〇年前後という「国家総動員体制」期の検定教科書とはいえ、日々学校で学ぶ子どもたちのすがたを目に浮かべて編輯したものである。これらの教科書から、国家政策に従わざるを得なかった側面とともに、教育者としての信念を貫こうとした側面をも見ることが可能なはずである。実際、「五種限定統制」へと移行していく一九三八年度用の教科書の総目次を見ると、それぞれの編輯者の苦労と配慮を窺い知ることができる。

それらと比較して、一九四三年から一九四五年にかけて使用された文部省編『中等国文』『国文』については、正岡子規、松尾芭蕉などの俳句や金田一京助、寺田寅彦、小泉八雲、島崎藤村などの随筆も配されており、そこでめざされた独自の教養観を見ることができるものの、アジア・太平洋戦争末期の情勢を反映してより一層軍国主義的、尊皇愛国の教科書となっていった。

これら教科書内容の変遷と戦後初期の教科書との関連を明確にするため、吉田裕久氏の『中等国文』と暫定教科書との関連を示唆する研究を踏まえて、五種限定統制教科書、『中等国文』『国文』、戦後初期の新制中学校教科書、高等学校教科書との関連を把握していくのが本研究の課題である。そのため、本論では一九四〇年代最後の中等「国語」教科書となった『中等国文五』『国文六』の特徴とその教養観について考察しておきたい。

二　『中等国文五』『国文六』の考察

1　先行研究の考察

『中等国文』『国文』の考察にあたり、先行研究として吉田裕久氏の所論を検討する。具体的には、「『中等国文』（一九四三）の編纂過程―「森下日記」の分析を通して―」「『中等国文』（一九四三）の研究―編纂理念と指導法を中心に―」「『中等国文』（一九四三）の研究―『中等国文五』・『国文六』を中心に―」の三篇[4]で考察された論点の整理をする。

「『中等国文』（一九四三）の編纂過程―「森下日記」の分析を通して―」には、吉田氏が偶然入手したという森下二郎記・西尾実編『神と愛と戦争―あるキリスト者の戦中日記』に記載された『中等国文』の編輯過程が紹介されている。同郷で教員生活を送った縁から、森下は西尾実の紹介で文部省の嘱託となり、『中等国文』の編輯に参加した。戦時下のこともあり、『中等国文』の編輯経緯はこれまで詳らかにされてこなかった。しかし、その編輯の経緯が森下の日記には認められていたのである。

それによると、西尾実が『中等国文』の編纂の中心におり、当初は教材選定などに森下も重要な役割を果たしていたが、教材の選定・決定は編輯委員の西尾と島津久基と文部省の図書監修官との間で協議されるようになり、校正・編輯は中等教科書株式会社編集局国語科員が担当することになっていったという。森下が嘱託として文部省に勤務したのは、一九四三年四月から一九四四年一〇月までの一年半に及んだが、キリスト者であった彼が重要な役割を演じたのは、そのうちのわずかな時間であったことがわかる。

結局、『中等国文』の編纂は文部省内の動向に支配されたものであることが、森下日記からは読めてくる。徳冨蘆花の文章でさえも採録に疑問

を呈するような空気に、リベラルな宗教家は、それでもよく耐えて編纂にあたったと吉田氏は指摘する。

次に、「『中等国文』（一九四三）の研究―編纂理念と指導法を中心に―」では、『中等国文』の編纂趣意書を対象に、『中等国文一』『中等国文三』の編纂理念と指導法が考察されている。「国語漢文」分野はすでに「国民科国語」として再編された。「皇国の古典を中心とし」た教科書の編纂が狙いとされ、さらに『中等国文』は、「皇国ノ道ノ具現タル各時代ノ国文」を「採択排列」することが強調された。

『中等国文一』では、この見地から「古典に親しませ、古典読解力を養う」教材が排列された。具体的には、「国土美の諸相を示し、国土愛の自覚に備えた教材」として、「富士の高嶺」（万葉集）「産土神と氏神」（芳賀矢一）「松江の暁」（小泉八雲）「菖蒲の節供」（島崎春樹）「姫路城」（小学国語読本）「柿の花」（正岡子規）「涼み台」（寺田寅彦）「泉の徳」（柳田国男）、「わが国土美に結合した国史美の精髄ともいうべき武士道精神の諸相を反映した教材」として、「戦国の武士」（常山紀談）「武士気質」（藩翰譜）「親心」（雲萍雑志）などが収録された。

また、『中等国文三』では、古典読解力を育成するために、「わが国史美の精髄を具現した教材」として、「宇智の大野」（万葉集）「草薙の太刀」（古事記）「東郷司令長官戦闘詳報」（東郷連合艦隊司令長官戦闘詳報）「乃木将軍」（森林太郎）「明治天皇御製」、「伝統を中軸とした言の葉の道、国語に就いて考察した教材」として、「磯でとゞろに」（源実朝）「心の小径」（金田一京助）「学者の苦心」（芳賀矢一）「「家」がいかに重きを成しているかを示そうとした教材」として、「源家のほまれ」（平家物語）「浮島が原」（義経記）「磯でとゞろに」（源実朝）「文武の道」（神皇正統記）「乃木将軍」（森林太郎）が収録された。

「『中等国文』（一九四三）の研究―『中等国文五』・『国文六』を中心に―」では、「最初の中等学校教科書でありながら、物資不足の中で、色刷り、挿絵など、また戦時下ゆえの思想統制で、思うにまかせない編集であったこと」、「当初は、学年二冊を想定していたものと思えるが、中学三年生は一冊となり、しかも四年生は検定教科書として編纂されていたこと」、「巻五、六は編集はされたものの、結局発行・供給・使用されないままだったこと」が明らかにされている。また、吉田氏は、『中等国文』は敗戦後に刊行された暫定教科書である『中等国語』『国語』との関連が深く、一定数の教材が継続して採録されていることについて事実をもって論証している。

2　『中等国文五』『国文六』の特徴と教養観

『中等国文五』『国文六』の特徴についての考察にあたっては、岩波編輯部編旧制中学校「国語漢文」科用教科書『国語』の考察で使用した評価の観点を立てることにする。吉田裕久氏の論考に指摘されているように、『中等国文』『国文』の編纂の中心にいたのは西尾実である。西尾実が編輯した『国語』は、一九三〇年代後半には全国の中学校の大半で採用された教科書であった。[5] その編纂理念は、『中等国文』『国文』にも及んでいると考えられる。したがって、本論では、『国語』を分析したときの観点を引きついでいくことで、『国語』と『中等国文』『国文』の関連を見ていくこととする。具体的な観点は、行的認識、国民精神の涵養、尊皇思想、自然、追憶、家族、学問、芸術などである。

(1)『中等国文五』の特徴と教養観

『中等国文五』には、小説一篇、随筆一篇、評論二篇、古文九篇、和歌三篇の合計一七篇が収められている。

国民精神の涵養、尊皇思想

『中等国文五』の基本的な構成は、四課「国文学の伝統」（芳賀矢一）、二課の古文「やまとうた」（紀貫之）の二篇の和歌論を基軸にその例証として勅撰集『古今和歌集』『新古今和歌集』、準勅撰集『新葉和歌集』、平安時代後期、南北朝時代の歴史物語を置いている。日本の和歌の伝統が他民族より優れた芸術と主張することで、日本民族の絶対的な優越性を示すものとなっている。

四課の評論「国文学の伝統」（芳賀矢一）は、和歌が日本古来の伝統として文芸の源となっており、それが「敷島の道」「言の葉の道」と呼ばれ「全国民の必ず知らねばならぬ道」とされてきたと述べている。歌の隆盛は日本人の忠君愛国の思想と歌とが結びついているからだとする。

一課の和歌「若菜」（古今和歌集）には、六歌仙から僧正遍昭、在原業平、撰者の紀貫之、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑及びよみ人知らずの和歌一二首が採られている。『古今和歌集』は日本で初めての勅撰集であった。

二課の古文「やまとうた」（紀貫之）は、『古今和歌集』の「仮名序」より和歌の本質と起源、『古今和歌集』の編纂過程について述べた冒頭部と末部を収めている。

五課の古文「恩賜の御衣」（大鏡）は、菅原道真の左遷問題のくだりである。「こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」の和歌に代表される学問、書、詩文にすぐれた文人として描かれた。

九課の和歌「天の香具山」（新古今和歌集）は、後鳥羽院、藤原俊成、藤原定家、西行法師ら一二首を収めている。『新古今和歌集』は八代集最後の勅撰集で後鳥羽院が編纂させた。

一〇課の古文「敷島の道」（増鏡）は、後鳥羽院の即位から隠岐配流までが描かれた場面を収めている。「おどろの下」では、院政期の水無瀬離宮造営、鳥羽殿・白川殿の修理という大事業を成し遂げた業績を讃え、「新島もり」では、承久の乱の敗北により隠岐に流された院の寂しい心中を語っている。

一一課の和歌「吉野の奥」は、後醍醐天皇、後村上天皇、長慶天皇、宗良親王、藤原師賢、北畠親房の和歌一六首が収められている。南朝の和歌集『新葉和歌集』より採られている。教科書に南朝の系譜で和歌を収めるのは異色であり、その採録の意図については検討が必要である。

武士道

武士の先見性、文化性、知性をさまざまな角度から描き出すことがめざされている。

六課の古文「光頼卿参内」（平治物語）は、平治の乱で藤原信頼の企てを阻止した光頼卿の活躍を描いている。

七課の古文「月の前」（上田秋成）は、源頼朝と西行が対面して歌の道と弓の道について交わした場面を描いた歴史小説である。末尾で西行が「たゞ悲しむべきは、神の御裔のこの後やう〳〵衰へさせ給はん世の姿なるは」と涙にくれた場面が印象的である。『吾妻鏡』を原本とした歴史小説で上田秋成の『藤蔓冊子』巻四（文集）に収められている。

一二課の古文「説話三則」は、「大食調入調曲」（古今著聞集）「不動尊の火焔」（十訓抄）「つはものの道」（宇治拾遺物語）の三篇を収めている。「大食調入調曲」は源義光が足柄山で笙の秘曲を豊原時秋に授けた逸話である。時秋は代々笙の名家の出自であった。「不動尊の火焔」は、我が家が火事で燃えたことで不動明王の火炎が描けるようになった絵仏師良秀の話である。その絵は「よじり不動」として褒められたが、家族を犠牲にしてまでも芸術を重視する物語は、芥川龍之介の「地獄変」（『大阪毎

日新聞』一九一八・五）の典拠となった。「つはものの道」は、壱岐守宗行にささいなことで殺されそうになった家来が新羅に逃げ込んで虎退治をして国守に褒美をもらい日本武士の評価を高めて帰国したという話である。三篇ともに鎌倉時代の説話集である。

一三課の狂言「鞆猿」は、遠国の大名が気晴らしに太郎冠者と狩りに出かけた話である。大名が道で出会った猿引の猿皮を強引に要求するので、命の危険を感じた猿が機転を利かせ物真似の芸を始め、猿引も猿歌をうたい、それを観た大名も上機嫌になり、扇や太刀、着物まで与え、自ら猿の真似をしてはしゃぐという内容である。著名な「大名狂言」の一つである。

一四課の小説「不惜身命」（山本勇造）は、槍の達人中村市衛門と徳川家光の御前試合をすることになった十蔵の物語である。試合の結果は無勝負となり、十蔵の評判があがり、親類からは「不惜身命」と書かれた布地の贈り物があった。得意になっていた十蔵に、柳生又衛門は武道の拵えができていないと言って「まことの勇者は命を惜しみ、一大事に初めて不惜身命の働きができる」と諭した。それから十蔵は「不惜身命のもう一つ向かふの惜身命にひたらうと努めた」という内容である。

八課の随筆「名器を毀つ」（薄田淳介）では、伊達正宗が家に伝わる高価な天目茶碗を毀すことで自分の落ち着きを取り返すことができたという話、和州小泉の城主で茶人の片桐貞昌が、古渡の陶器が酒器に用いられているのを買い取り毀してしまったという話から、名器は失われたが一層尊いものを救うことができたことが述べられている。

日本文化と行的認識

尊皇思想が和歌を軸に強調され、武士道が美化されるものが多いなかで、文武を調和させるように自然観、人生観を学ばせる『枕草子』『徒然草』、俳諧の紀行文として教科書に長く収められてきた『奥の細道』を入れている。また、和辻哲郎の風土論からも一篇を入れ、日本文化の固有性を学ばせる狙いがある。

三課の古文「春は曙」（枕草子）は、第一段「春は曙」の正月から冬までの各段、第二五段「にくきもの」が収めている。

一五課の古文「先達」（徒然草）は、「仁和寺にある法師」「能をつかんとする人」「貝を覆ふひとの」「或る者、子を法師になして」「一道に携る人」「平宣時朝臣」の六篇が収められている。

一六課の古文「奥の細道」（松尾芭蕉）は、門出、白河、松島、平泉、立石寺、最上川、象潟の各場面が採られている。『国文六』にも一部異同の「奥の細道」が収められている。

一七課の評論「固有の偉大さ」（和辻哲郎）は「城」の抄録で一部改編が見られる。和辻は、関東大震災後に復興した東京で鮮やかな印象をとどめるのは、お壕の石垣和田倉門など城郭の後であると述べる。その理由は、復興した高層建築に比較して、それぞれが固有の様式をもって立っているからだとする。それは大阪城も同じで、中の島の高層建築に対して大阪城の石垣の巨石に驚かされる。それを生み出したのは、その時代の固有の偉大さであり、それぞれの時代的風土的な特殊な様式に焦点を当てる必要があると結んでいる。和辻の風土論から城郭を取りあげることで、武士道をも考えるというのが編集の意図にあることは明らかであろう。

『中等国文五』の特徴と教養観

『中等国文五』の最大の特徴は、二課「やまとうた」（紀貫之）と四課「国文学の伝統」（芳賀矢一）の和歌論、一課「若菜」（古今和歌集）、九課「天の香具山」（新古今和歌集）、一一課「吉野の奥」の勅撰、準勅撰

の和歌集が配され、五課「恩賜の御衣」（大鏡）、六課「光頼卿参内」（平治物語）、一〇課「敷島の道」（増鏡）の軍記物語、歴史物語、七課「月の前」（上田秋成）、八課「名器を毀つ」（薄田淳介）、一四課「不惜身命」（山本勇造）、一二課「説話三則」、一三課「鞆猿」の武士道にまつわる逸話、小説が挟みこまれていることである。

これらの排列からは、このほかの三課「春は曙」（枕草子）、一五課「先達」（徒然草）、一六課「奥の細道」（松尾芭蕉）までもが日本文化の卓越性を示す教材として置かれているかのように映る。一七課「固有の偉大さ」（和辻哲郎）も、城郭の美についての評論であり、同じく日本の伝統文化と武士道を結び付けて論じていることに関心が向く。

（2）『国文六』の特徴と教養観

先に見た吉田裕久氏の研究で明らかにされたように、『国文六』は事実上使用されることはなかった。しかし、当時の中等学校生に学ばせるために編輯されたことは間違いなく、その内容を検討しておくことは一九四〇年代後半の「国語」教科書内容との連続・不連続を考察するうえで不可欠である。

『国文六』には、小説一篇、評論四篇、古文一〇篇、和歌三篇の合計一八篇が収められている。古文の排列は、上代から近世へと歴史の流れに沿っている。

国民精神の涵養、尊皇思想

『国文六』では二つの評論が柱になっている。

三課の評論「古典と創造的精神」（高木市之助）は、聖徳太子の「一七条の憲法」を事例に、「このような古典に於ける和の精神は、その根源に於いて天皇の御存在に負うてゐる」と述べ、「古典のいくつかの流れを遡り尽くした源流に於いてもまた、やすみししわが大君おはします」と結論している。

一八課の評論「歴史への責任」（玉井勝則）は、南方戦場での体験をもとに「総べての日本人の一人一人が、直ちに日本であり、歴史である」と述べて、「米英撃滅を言ひ、撃ちてし止まむを唱へるのも、日本人たるの自覚と、皇国日本の比類なき歴史への信頼とに従つて、静かに胸奥に湧いて来る愛国の熱情が内に潜み、たぎり、こんこんと泉の如く発して来る誇りでなければならない」と結論する。一課の「撃ちてし止まむ」の題名と、この箇所が呼応させられている。

注意深く読んでいくと「歴史の流れは、人力では、どうすることもできない不可抗力であるときめる考え方には、必ず無責任な頽廃が生ずる」「歴史の流れに身をゆだねることはたやすい」などと述べられていることに気づく。教科書にさえ戦争で日本が勝利するという確信の揺らぎを述べざるを得ない状況にあったことがわかる。学び手が最も依拠すべき教科書にまで日本が追い込まれていることを示している点で興味深い。

扇情的に尊皇と愛国を唱えた玉井勝則（火野葦平）は、一九三八（昭和一三）年、日中戦争に従軍中に「糞尿譚」で芥川賞を受賞して、「麦と兵隊」「土と兵隊」（ともに『改造』、一九三八年）「花と兵隊」（『改造』、一九三九年）の兵隊三部作で流行作家となった。戦後は、戦争責任を問われて公職追放になったが、再び作家活動に入る。

これらの評論の尊王思想を歴史的に裏付けることを意図して、古代から蓄積されてきた多数の古文のなかから数篇が意図的に取捨選択されている。

一課の古文「撃ちてし止まむ」（古事記）は、『古事記』冒頭の「神武天皇」と「倭建命」の「東征」を採っている。題名の「撃ちてし止まむ」は、「神武天皇」の「みつ〳〵し　久米の子らが　粟生には　臭韮ひとも

と　そ根がもと　そ根芽つなぎて　撃ちてし止まむ」などの和歌三首の末尾で繰り返される「撃ちてし止まむ」の一句である。

「倭建命」は、東征から西に戻る倭建命が死に白鳥になる場面を採っている。「倭は　国のまほろば　たゝなづく　青垣　山ごもれる　倭しうるはし」など比較的よく知られた和歌が多い場面である。

二課の和歌「たぎつ河内」（万葉集）には、冒頭に柿本人麻呂の歌が置かれている。「やすみしし　わが大君　神ながら　神さびせすと　吉野川たぎつ河内に　高殿を　高しりまして　登り立ち　国見をすれば〈以下略〉」という長歌である。大君と民との平安が描かれている。

四課の古文「恩賜の御衣」（大鏡）は、『中等国文五』と同一教材である。

一六課の古文「直毘霊」（本居宣長）は、賀茂真淵の『国意考』と並ぶ復古神道を代表する『古事記伝』の「序文」である。『古事記伝』は、『古事記』の本文注釈であり、「直毘霊」はその根幹の「神道（かみのみち」論を記述している。その道は、「天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず」と述べて、他の「神道」論と区別している。皇大御国は「神ながら安国」であったので古の大御世には「道」という言挙げもまったくなかった。しかし、渡来した書籍を読むようになり、他と区別するために古来の風習が「神道」と名付けられた。さらに、漢国から学ぶことが盛んになり、天皇の政治や人心までがその意に染まった。今、漢意を排し、日本古来の精神に戻るべきであるという内容である。

一七課の和歌「尊きこの身」（平賀元義・佐久間東雄）はともに幕末の歌人の和歌である。万葉調の歌を詠んだことで知られる平賀元義の歌七首と国学者で尊皇の歌人であった佐久間東雄の和歌三首である。佐久間の「人道を詠める歌」は、「わが君にまさる君なし　わが祖にまさる祖なし」で始まる長歌から題名の「尊きこの身」が採られている。

武士道

国民精神の涵養、尊皇思想と深くかかわる内容として武士道が強調されている。

六課の古文「橋合戦」（平家物語）は、宇治橋の源平の攻防を描いた場面である。『平家物語』に描かれた最初の本格的な合戦として知られてきた。橋上での名乗りと立ち回りの描写が武士の合戦の特徴としてよく表現されている。この合戦を機に平家打倒の動きが加速するとされるが、まだ平家の力が強く以仁王、源頼政らは敗北の憂き目に遭うこととなった。

一一課の古文「由利の八郎」（吾妻鏡）は、鎌倉幕府が編纂した歴史書から採られている。平泉の豪傑、由利八郎が捕虜になった場面を描いている。由利は梶原景時の無礼な尋問に一切答えなかったため、畠山重忠が丁重に尋問して頼朝が直接面談することになった。頼朝が泰衡の弱腰を指摘したところ、由利が「それを言うなら貴殿の父義朝は平治の乱で東海道一五カ国を有しながら一日も支えられず殺されたではないかどっちもどっちではないか」と反論した。頼朝は反論できずに所領安堵を認めて、由利は鎌倉後家人となったという内容である。

一二課の古文「葉隠抄」（山本常朝）は武士道の心得を説いた一文である。「武士道に於いて後れ取り申すまじき事」「主君の御用に立つべき事」「親に孝行仕るべき事」「大慈悲を起し人のためになるべき事」の四誓願を講じている。

一三課の小説「與津彌五右衛門の遺書」（森林太郎）は、江戸時代の武士の殉死（追腹）に至る経緯とその内面を遺書の形式で描いた歴史小説

である。茶事に使う珍品を求めよと主命を受けた細川家の與津彌五右衛門は伽羅の大木の本木を入手しようとした。しかし、仙台の伊達家も大木を求めたため、末木でよいと主張した同僚の横田と口論になり、その挙句に彼を討ち果たしてしまった。結局、彌五右衛門は本木を手に入れ細川家に戻り切腹を申し出るものの、認められず横田の遺族と意趣をもちあわぬように誓願させられた。彌五右衛門は主君三斎公の一三回忌にあたり、ようやく三十数年前の宿願を認められ切腹したという内容である。斎藤茂吉は、「乃木大将殉死行為に対する有力学者等の批判が新聞に載ったのを読んで、先生の抱懐した信念を、議論の形式に拠らずに、過去の事実を外貌としてその中に織り込ませるといふ歴史小説的手段を取った」と評している。(6)

日本文化と行的認識

武士道が力を素材にしているのと対照的に、心を素材とする日本文化と行的認識に関わる教材が収められている。

五課の古文「白良の浜」（催馬楽・梁塵秘抄）は「紀伊国」「難波の海」「岩もる水」「遊ぶ子供」の著名な歌謡四篇を収めている。「遊ぶ子供」は、「遊びをせんとや生まれけむ」の歌謡である。

七課の和歌「早蕨」（金槐和歌集）は、源実朝の私家集である。「早蕨のもえいづる春になりぬれば野べの霞もたなびきにけり」など一二首を収める。清新な歌が多く、後の歌人にも大きな影響を与えた。

八課の評論「深穏」（阿部次郎）は、深穏の境地について、田能村竹田「山中人饒舌」の画論、杜甫の詩を事例に考察している。田能村の画論には「筆力の深穏と墨気の沈厚」を、杜甫の詩には馬の「目つきの清高と気性の深穏」を見ている。深穏の気性を受けることが新しき世界の創造につながると締め括っている。西尾実の「行的認識」と相通じるものがある。阿部は第一高等学校時代に夏目漱石の門をくぐり、『三太郎の日記』（一九一四年）で「大正教養主義」の担い手となった。

九課の古文「法語抄」（歎異抄・正法眼蔵隋聞記）は、親鸞・道元の法語を記録した『歎異抄』『正法眼蔵隋聞記』を収めている。「歎異抄」では、「親鸞に於きては、唯念仏して、仏陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せをかぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり」「善人なほもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや。然るを世の人常に曰く、悪人なほ往生す、いかに況んや善人をやと」の箇所を収めている。「正法眼蔵隋聞記」では、「仏は身内手足をさきて衆生に施せり。現に餓死すべき衆生には、たとひ仏の全体を以つて与ふるとも、仏意にかなふべし」「玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。いずれの玉か初めより光ある。誰人か初心より利なる。必ず須らくこれ琢磨し練磨すべし」の箇所を採っている。

一〇課の古文「鉢の木」（謡曲）は、北条時頼の逸話である。大雪の夜に佐野源左衛門常世が旅の僧（北条時頼）に宿を貸し、秘蔵の鉢植えの木を焚いて歓待した。その席で常世は、落ちぶれた身ではあるが、一大事の際は一番に駆けつける覚悟だと話す。後日、常世はその言葉どおりに鎌倉に馳せ参じ、時頼にその誠実さが認められ本領を安堵されたという展開である。

一四課の古文「奥の細道」（松尾芭蕉）は、『国文五』と同じ教材ではあるが、一部入れ替えがある。門出、白河、平泉、象潟はほぼ同じであるが、松島、立石寺、最上川が削除され飯塚が入れられている。いずれにせよ、半数以上同一の教材が収められていることの意図するものは不明である。

一五課の評論「一筋の道」（穎原退蔵）は、芭蕉の軽み、風雅の誠に至

る道の意義を述べながら、国と人の一筋の道に言及している。芭蕉について「浪華の客舎に夢は枯野を駆けめぐりながら、これさへ妄執と観じつゝも、風雅の上に死なん身の道を切に思ふなり。」と言った。この妄執と共に一生を終ることは、実にかれの願ひであつた」と述べ、「芭蕉が歩いた一筋の道は、結局軽みの境地に至るためのものであつたといつてよい。かれの風雅はこゝに完成されたのである」とまとめている。そのうえで、芭蕉の一生は「一筋に進む国の歩みに従つて、われ〳〵もまた与えられた一筋の道を迷ふことなく進んで行かう。誠を勤める国と人のみが、真に叡智の正しき導きを得るものであることを信ずる」と締めくくっている。

『国文六』の特徴と教養観

このように『国文六』は、尊皇愛国忠君の国体思想を学ばせ国民精神を徹底して涵養しようとする意図が明確である。そのために、国体思想を学ぶにふさわしい評論を集め、それを史的に裏付けする古文を配置する工夫が見られる。しかし、それだけでは教科書にならないことは編輯した当事者が最もよく意識していたことが内容からはうかがえる。

たとえば、五課「白良の浜」（催馬楽・梁塵秘抄）、一四課「奥の細道」（松尾芭蕉）からは、直接国体思想を感じさせるものはない。歌謡、紀行を学ぶことで精神的な高みをめざす学びが期待される教材としてよい。七課「早蕨」（金槐和歌集）、一〇課「鉢の木」（謡曲）にしても、源実朝、「いざ鎌倉」という鎌倉幕府に関わる内容ではあるものの、学習の主眼は和歌、能楽にある。

また、六課「橋合戦」（平家物語）、一一課「由利の八郎」（吾妻鏡）、一三課「與津彌五右衛門の遺書」（森林太郎）も、武士道を直接の素材としているものの、それが無条件に国体思想と結びつくわけではない。

さらに、八課「深穏」（阿部次郎）、九課「法語抄」（歎異抄・正法眼蔵隋聞記）、一五課「一筋の道」（穎原退蔵）は、行的認識を学ぶに適した教材ともいえる。

しかし、国民精神を涵養するために、三課「古典と創造的精神」（高木市之助）、一八課「歴史への責任」（玉井勝則）で尊皇思想を深く教え込み、一課「撃ちてし止まむ」（古事記）、四課「恩賜の御衣」（大鏡）、一六課「直毘霊」（本居宣長）、一七課「尊きこの身」（平賀元義・佐久間東雄）の古文を学ばせるという構成をとっていることが問題なのである。そして、その間に先の日本文化、行的認識の現代文、古文を置くことで、全体として尊皇愛国忠君の国体思想を学ばせる教科書となっていることに注意する必要がある。これらの教養が、結局は帝国日本のアジア・太平洋戦争遂行の道具とされていったことになる。

（3）『中等国文五』『国文六』の評価

西尾実が一九三〇年代後半に編輯した『国語』では、尊皇思想と国民精神の涵養を主題とする現代文教材は一五課であった。古文教材を含めても二〇課程度である。しかも、それらは巻一・二に集中していた。この傾向は、『国語』改訂版でも変わらない。松崎正治・浜本純逸「昭和戦前期における西尾実の学習指導観―岩波『国語』とその教授用参考書の分析を通して―」[7]では、『国語』改訂版について収録本文二二五課のうち、「皇国民育成教材」は一〇課であると指摘している。

一九三〇年代後半には、西尾は尊皇思想と国民精神の涵養を主題とした教材を可能な限り行的認識と関連づけて編輯していた。それは、尊皇愛国の傾向を持つ教材数を減らし、しかもそれらの教材を一部の巻に集中させ、『国語』の帝国主義的性格を弱める点では一定の効果があった。しかし、行的認識と関連づけたことで結局は自閉した構造が作られたと

いう弱点を持っていた。その弱点が『中等国文』『国文』の編輯でさらに拡大して、「国語」教科書としては致命的なものとなっていったのである。したがって、『国語』に見られた、自然、追憶、家族、学問、芸術というような教材はすっかりすがたを消してしまったのである。

行的認識論は自己の内面の凝視を主眼とするため、自己と相対的に区別される他者への配慮や認識を弱くする議論である。この議論にこだわるかぎり、他者と共同して実践するという視点は出てこない。「国語」という言語を軸にした学びでは、その性格から他者との共同が最も意味を持つ。しかし、行的認識論は、「国語」の性格を自閉的にする。そのため『中等国文』『国文』は、尊皇思想と国民精神の涵養を特徴とする教科書であっただけでなく、行的認識を底流にすることによる自閉的な教養観を持った教科書となったのである。

井上敏夫は、一九四〇年代前半の「国語」教育について、次のように述べている。[8]

> 国語教育もまた文学作品の自由な鑑賞・表現活動よりも、行的方法・解釈学的方法による教材の精緻な探究に重点がおかれ、国語教材にもこの学習方法に好適の思索的随筆論文などが選択されるようになる。／しかし、戦局の緊迫は、ついに古典、日本文化絶対の唯我独尊的学習内容を、日本的鍛錬道によって収斂するという時代を出来させ、理念として存在した言語生活重視の国語科学習内容も、現実には具体化されることなく終わってしまうことになる。

西尾の残した文章を見るかぎりにおいては、西尾には井上の指摘のような自覚はなかったと思われる。しかし、戦後になって、「言語生活主義」を明確に打ち出す「国語」教育観を提示して教育実践の指針とした事実は、西尾の戦争責任への反省として受けとめておく必要がある。

三　一九四〇年代後半の「国語」教科書例と今後の研究課題

1　『中等国文』『国文』から『中等国語』への移行

一九四〇年代後半にあたる敗戦後の混乱期には、『中等国語』（一九四六年）が刊行された。『中等国語』は暫定政策として刊行されたものであった。『中等国文』『国文』に収録された教材のうち皇室賛美、軍国主義教材を省いたものを中心にして編輯されている。たとえば、『中等国語一』の国文篇では、「富士の高嶺」（万葉集）、「菖蒲の節供」（島崎春樹）、「柿の花」（正岡子規）、「涼み台」（寺田寅彦）、「親心」（雲萍雑志）、「秋から春へ」（徳冨健次郎）が継続している。これは、『中等国文』が軍国主義賛美の教材ばかりではなかったことをも意味する。また、「私設大使」（山本勇造）、「水の美」（川合芳三郎）、「雪の研究」（中谷宇吉郎）などの新教材もあり、戦後新教育への政策的胎動であったことを示唆している。

『中等国語』（一九四七年）では、その収録教材は大幅に刷新された。たとえば、『中等国語一（一）』では、一課「第一歩」、二課「世界をつなぐもの」、三課「雨にもまけず」（宮沢賢治）、四課「おはよう」（西尾実・山村暮鳥）、五課「昆虫記」（ファーブル）、六課「潮目」（宇田道隆）、七課「日記から」、八課「初夏の奈良」（荻原井泉水）、九課「りすを育てる」（中西悟堂）、十課「末ひろがり」（狂言）、十一課「涼み台」（寺田寅彦）が収録された。

『中等国語』（一九四七年）は日本国憲法、教育基本法法制化での新教育にふさわしい内容になっている。ここには、日本帝国の崩壊、アジ

ア・太平洋戦争の敗戦、ＧＨＱ占領下の日本の民主化を背景にした主権者教育の一環としての「国語」教育の揺籃を「国語」教科書に見ることができる。

一九四八年より後期中等教育として新制高等学校が発足する。その前年に『高等国語』が刊行された。たとえば、『高等国語一（上）』には、一課「藤村詩抄」（島崎藤村）、二課「笛吹川をさかのぼる」（田部重治）、三課「太郎冠者」（野上豊一郎）、四課「記録映画の幻想性」（津村秀夫）、五課「東海道五十三次」（岡本かの子）の教材が収録された。収録数そのものも多くはないうえに、用紙の制限からか使用活字も小さく、けっして読みやすいものではない。しかし、そこに見られる収録傾向からは『中等国語』の場合と同じく新教育への期待が伝わってくる。

2　一九四〇年代末から五〇年代の「国語」教科書例

一九四九年刊行の「国語」教科書になると、単元構成が明確になり、期待される学びの内容がさらに豊かになっている。たとえば、柳田国男編『新しい国語一下』（東京書籍、一九四九年）では、「働くよろこび」「読むたのしみ」「自然を相手に」「土地とことば」「放送劇」「手紙」「思い出」の単元が立てられている。それぞれの単元には、一課「畑を鋤く男」（花岡謙二）、四課「一ふさのぶどう」（有島武郎）、六課「天気予報の理解（気象と生活）」（和達清夫）、九課「あいさつのことば（毎日のことば）」（柳田国男）、十一課「風の子」（山本映佑、脚本・山本嘉次郎）、十二課「まごころ　一　父より子へ」（夏目漱石）、十三課「野球の思い出（ホームラン物語）」（内村祐之）など、多彩な教材が収められるようになってきた。

3　今後の研究課題

一九四〇年代後半の「国語」教科書事例を概観しても、わずか一〇年間を挟んだ教科書にもかかわらず、これらからはアジア・太平洋戦争開戦から敗戦、日本の民主化という大きな変動を経験したことで、「国語」教科書とその教養形成をめぐる環境も著しく変化したことを確認することができる。今後は、一九四〇年代前半の「国語」教科書の分析の上に立って、一九四〇年代から五〇年代にかけて中等「国語」教育がめざした理念の確認と「国語」教科書に見られる教養観を考察することである。

付記　本研究は、広島経済大学特定個人研究費（二〇一三年度）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

(1)「国語」と表記するのは、教科としての「国語」が一九世紀から二一世紀前半にかけて日本近代社会で歴史性・思想性を帯びた教科名として使用されたことを明確にするためである。

(2)研究成果の一部は、拙著『芥川龍之介編『近代日本文芸読本』と「国語」教科書　教養実践の軌跡』（溪水社、二〇一一年二月二五日、第35回日本児童文学学会賞特別賞）で公表した。

(3)各検定教科書の総目次とその特徴は、「五種限定統制」移行期の旧制中学校「国語読本」総目次(1)（『広島経済大学研究論集』第三四巻第四号、八七－一〇九、二〇一二年三月）、「五種限定統制」移行期の旧制中学校「国語読本」総目次(2)（『広島経済大学研究論集』第三五巻第一号、八五－九五頁、二〇一二年六月）、「五種限定統制」移行期の旧制中学校「国語読本」総目次(3)（『広島経済大学研究論集』四号、二一七－二三〇頁、二〇一三年三月）で考察した。

(4)「『中等国文』（一九四三）の編纂過程―「森下日記」の分析を通して―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部』第五六号、二〇〇七年一二月二八日、一一一－一二〇頁）、「『中等国文』（一九四三）の研究―編纂理念と指導法を中心に―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部』第五七号、二〇〇八年一二月二六日、一一七－一二六頁）、「『中等国文』（一九四三）の研

究―『中等国文五』・『国文六』を中心に―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部』第五八号、二〇〇九年一二月二五日、九三－一〇二頁）

（5）『国語』の指導資料として刊行された『国語　特報』には、一九三七（昭和一二）年度には四〇八校、一九三八（昭和一四）年度には六一七校で採用されたと記録されている。

（6）斎藤茂吉「鷗外の歴史小説」『文学』一九三六年六月、岩波書店。引用は、『斎藤茂吉全集』第二四巻、岩波書店、一九七五年九月二七日、二八－二九頁。

（7）松崎正治・浜本純逸「昭和戦前期における西尾実の学習指導観―岩波『国語』とその教授用参考書の分析を通して―」『神戸大学教育学部研究収録』第七八集、一九八七年三月二〇日、二五頁。

（8）井上敏夫『教科書を中心に見た国語教育史研究』溪水社、二〇〇九年九月二一日、四〇六頁。

表　『中等国文』『国文』総目次

一　一九四四（昭和一九）年一二月一〇日修正翻刻発行　著作・発行　文部省　翻刻発行・中等学校教科書株式会社
二　一九四四（昭和一九）年八月三〇日翻刻発行　著作・発行　文部省　翻刻発行・中等学校教科書株式会社
三　一九四四（昭和一九）年四月二〇日翻刻発行　著作・発行　文部省　翻刻発行・中等学校教科書株式会社
四　一九四四（昭和一九）年九月三〇日翻刻発行　著作・発行　文部省　翻刻発行・中等学校教科書株式会社
五　一九四五（昭和二〇）年一月二四日発行　非売品　著作・発行　文部省
六　一九四五（昭和二〇）年一月三〇日発行　著作・発行　中等学校教科書株式会社

一

一	和歌	富士の高嶺	万葉集	四
二	随筆	産土神と氏神	芳賀矢一	五
三	随筆	松江の暁	小泉八雲	九
四	随筆	菖蒲の節供	島崎春樹	一五
五	随筆	姫路城	小学国語読本	一九
六	随筆	戦国の武士	常山紀談	二五
		人間五十年		
		嶺の煙		
		缸破り柴田		
		山吹の花		
七	俳句	柿の花	正岡子規	三三
八	随筆	涼み台	寺田寅彦	三四
		新星		
		線香花火		
		藤の実		
九	歴史	武士気質	藩翰譜	五五

二

一	和歌	豊旗雲	万葉集	四
二	古文	大君のへに	太平記	六
		松の下露		
		院の荘		
		熊野落ち		
		吉野の花		
		船上のみゆき		
三	詩	秋のみのり		二四
		新穀感謝の歌	高村光太郎	二四
		利鎌の光	相馬昌治	二六
四	伝記	尊徳先生の幼時	富田高慶	二九
五	古文	一万と箱王	曾我物語	三二
		雁がね		
		かたき		
六	俳論	俳句への道	富安謙次	五一
七	俳句	城の松	正岡子規	五九

弓矢の家
うれし泣き
大事の使
日ごとの新誓
一〇　随筆　親心　雲萍雑志　七四
約束の松
詩歌の道
一人の弟子
石臼の目
一一　和歌　朝のこころ　橘曙覧　八〇
一二　随筆　泉の徳　柳田国男　八三

三

一　和歌　宇智の大野　万葉集　四
二　古文　草薙の太刀　古事記　五
三　記録　東郷司令長官戦闘詳報
東郷連合艦隊司令長官戦闘詳報　八
四　古文　源家のほまれ　平家物語　二〇
逆櫓
継信の最期
屋島
五　和歌　磯もとゞろに　源実朝　五二
七　古文　大塔宮　太平記　五五
柿の衣
緋縅の鎧
八　古文　文武の道　神皇正統記　七一
九　詩　乃木将軍　森林太郎　八〇
一〇　紀行　心の小径　金田一京助　八五
一一　評論　学者の苦心　芳賀矢一　九八
一二　和歌　明治天皇御製　一〇三
附録
一　評論　佐久間艇長の遺書　岩田豊雄　一

八　随筆　姫路城　武藤勝彦　六〇
九　随筆　測量生活　佐佐木信綱　六五
一〇　歌論　和歌の四季　七六
一一　手紙　亡きあと　原惣右衛門の母　八九
一二　随筆　根分けの後の母子草　滝沢解　八八
一三　古文　屋島　平家物語　九八
逆櫓
継信の最期
那須与一

四

一　和歌　鞆の音　万葉集　四
二　古文　大国主神　古事記　七
三　古文　人臣の道　神皇正統記　九
四　古文　菊池一族　太平記　一四
父の教訓
筑後川の戦
五　俳句　月天心　与謝蕪村　二八
六　評論　樹氷の世界　中谷宇吉郎　三〇
七　評論　たぎりたつた時代の人　幸田成行　三五
八　戯曲　長柄堤　坪内雄蔵　五四
九　書簡　松陰と家庭　吉田松陰　七一
一〇　古文　高名の木のぼり　徒然草　七六
高名の木のぼり
水車
榎の木の僧正
植うること
兵仗の難
馬乗り
二つの矢

二	紀行	俳句行	高浜清	一二
		逞しい機械力		
		戦う炭焼き部落	富安謙次	
三	随筆	青芝の山	矢沢邦彦	二〇
四	随筆	ビルマ国誕生の日		三三
五				
一	和歌	若菜	古今和歌集	四
二	古文	やまとうた	紀貫之	六
三	古文	春は曙	枕草子	八
四	評論	国文学の伝統	芳賀矢一	一三
五	古文	恩賜の御衣	大鏡	一八
六	古文	光頼卿参内	平治物語	二二
七	古文	月の前	上田秋成	二六
八	評論	名器を毀つ	薄田淳介	三一
九	和歌	天の香具山	新古今和歌集	三五
一〇	古文	敷島の道	増鏡	三七
		おどろの下		
		新島もり		
一一	和歌	吉野の奥		四一
一二	古文	説話三則		四四
		大食調入調曲	古今著聞集	
		不動尊の火焔	十訓抄	
		つはものの道	宇治拾遺物語	
一三	狂言	鞆猿		四九
一四	小説	不惜身命	山本勇造	五六
一五	古文	先達	徒然草	七二
一六	古文	奥の細道	松尾芭蕉	七八
		門出		
		白河		
		松島		
		平泉		

一一	評論	道	芳賀矢一	八一
六				
一	古文	撃ちてし止まむ	古事記	四
		神武天皇		
		倭建命		
二	和歌	たぎつ河内	万葉集	一四
三	評論	古典と創造的精神	高木市之介	一七
四	古文	恩賜の御衣	大鏡	二五
五	古文	白良の浜	催馬楽・梁塵秘抄	二八
		紀伊国		
		難波の海		
		岩もる水		
		遊ぶ子供		
六	古文	橋合戦	平家物語	三〇
七	和歌	早蕨	金槐和歌集	三六
八	評論	深穏	阿部次郎	三八
九	古文	法語抄		四一
		歎異抄		
		正法眼蔵隋聞記		
一〇	古文	鉢の木	謡曲	四四
一一	古文	由利の八郎	吾妻鏡	五四
一二	古文	葉隠抄	山本常朝	五七
一三	小説	與津彌五右衛門の遺書	森林太郎	六一
一四	古文	奥の細道	松尾芭蕉	六九
一五	評論	一筋の道	穎原退蔵	七四
一六	古文	直毘霊	本居宣長	七八
一七	和歌	尊きこの身	平賀元義・佐久間東雄	八二

立石寺
最上川
象潟
一七　評論　固有の偉大さ　和辻哲郎　八四
一八　評論　歴史への責任　玉井勝則